

下野新聞

平成22年6月11日掲載

6月議会で一般質問

子や孫に、立派な足利市を残してやりたい。



2010年(平成22年)6月11日

平成22年6月市議会定例会 質問

私は、今年3月2日に宇都宮で産婦人科学会等の主催による「子宮頸がんワクチンに関する研修」に参加し、子宮頸がんが治療後もなお後遺症に悩まされる女優・仁科亜季子さんの闘病記を聞いて、このワクチンの存在の大きさをより学ぶことができました。そして、娘をもつ母親として、また一人の女性としても声を大にして訴えていきたいと思いました。

研修の中で「子宮頸がんは検診とワクチン接種で100%予防できる時代になった。」と講演する子宮がんの権威でもあります自治医科大学産婦人科学講座講師の鈴木光明先生の啓発もあって、栃木県は全国の中でも先駆けて各市町が動き、ワクチン接種に掛かる5万円から6万円の負担を公費負担になるよう取り組んでおります。足利市においても是非、公費負担として住民の命と健康を守る対策を図るよう市長の英断に期待して質問しました。

また、子宮頸がんの検診率は全国平均22.9%に比べ本市は27.8%と若干高いようでしたが、欧米の80%以上に比べると大変低い現状です。これは予防医学の立ち遅れや女性自身にも検診のインセンティブ、意識の無さ、受診環境の不備などが原因とも考えられています。これらのことから啓発や教育・受診環境の整備についても質問しました。

次に、循環型社会の形成として今年から始まるプラスチックごみの分別モデル事業の時期と場所、目的など、また、それに伴う南部クリーンセンターや農業研修センターの老朽化からリサイクルプラザや農業振興策について質問しました。

最後に観光行政について、観光大使が三遊亭歌橋師匠とタレントの勝俣州和さんが委嘱を受けましたが、本市出身のムッシュ・ピエールさんや足利南高校卒業の河口恭吾さん、渡良瀬橋を歌う森高千里さんを今後の大使として提案し、市民レベルの地道な大使も必要ではないかと質問しました。

また、今年の「バルーンフェスタ」ではリピータ確保策として市内観光周遊バスの運行を提案しました。前向きに考えたいとの答弁でした。

新聞記事をそのまま掲載しました。

足利市議会 一般質問



大豆生田実市長

子宮頸がんワクチン助成
小学6年の女兒を對象に全額補助する。ワクチンは3回の接種が必要で、1回目と2回目は半年間空ける必要がある。本年度内の接種に大豆生田実市長は「遅くとも9月

には1回目を打たなければならぬ」と述べ、予算措置を7月の臨時議会に対応するとの考えを示した。

市内には小6女兒が約700人おり、接種費用は3回で約5万円、約3500万円が必要だが、大豆生田市長は「さまざまな改革で費用を捻出していきたい。自動販売機(の設置)に札制度導入で市の収入が約3800万円増える。もうけた分を充てたい」と、支出についても普及させたいと、

らに、女子中学生には半額を助成する考えも明らかにした。中島氏が質問した。中島氏が質問した。中島氏が質問した。

モテル地区を選定後、8月下旬から説明会を開く。分別収集されるのは、容器包装リサイクル協会に引き渡し、資源化される「プラ」などのマークが付いたプラスチック容器包装、菓子袋やトレーなど。県内では宇都宮市が4月からプラスチック容器包装ごみの分別収集を始めている。中島氏が質問した。

足利市は、市内の小学6年生の女子児童全員に対して、「子宮頸がん」予防ワクチンの接種を全額助成する方針を打ち出した。大豆生田実市長が10日、市議会

で中島由美子議員(市民クラブ)の一般質問に対して答弁した。県内では大田原市、日光市などで全額助成が決められている。足利市内の小学6年生の

女子児童は集団接種し、中学1~3年生の女子生徒は個別接種で半額助成を行う方針。今年度中の接種を目標とし、7月に臨時会を開き、助成に伴う予算の承認を求める。市健康増進課によると全額助成の対象は約700人、半額助成対象となるのは約2100人。ワクチンには1人あたり3回の接種が必要で、計約5万円かかる。大豆生田市長は財源に

ついて、飲料自動販売機の設置業者の選定で、条件付き一般競争入札を導入して増収となった約3800万円を充てるとした。

女性の声、届きました。

子宮頸がん予防ワクチン 足利市も小6 無料接種

足利市は、市内の小学6年生の女子児童全員に対して、「子宮頸がん」予防ワクチンの接種を全額助成する方針を打ち出した。大豆生田実市長が10日、市議会

読者新聞

平成22年6月11日掲載